

## 第13回 京都文化芸術都市創生審議会 摘録

日時：平成27年1月22日（木） 午後4～6時

場所：京都芸術センター フリースペース

出席委員（敬称略）：

池坊由紀会長，潮江宏三副会長，岡田暁生委員，佐野真由子委員，鈴木晶子委員，  
建畠哲委員，富永茂樹委員，永澄憲史委員，畑正高委員，早川一子委員，平井誠一委員，  
増田寿幸委員，真下仁志委員，山本淳子委員，藤田裕之委員

事務局：

京都市文化市民局担当局長 奥美里

京都文化芸術都市推進室長 森川佳昭

京都文化芸術都市推進室文化財担当部長 北村信幸

京都文化芸術都市推進室担当部長 山本ひとみ ほか

- 1 開会
- 2 京都文化芸術プログラム2020（仮称）の策定について
- 3 閉会

(別紙意見交換摘録)

<会長>

本日の議題は、「京都文化芸術プログラム 2020（仮称）」の策定についてである。

昨年 6 月の審議会において、「京都文化芸術プログラム 2020（仮称）」の策定について、京都市長から諮問を受けた。それを受けて、創生審議会の下に、「京都文化芸術プログラム 2020（仮称）策定会議」を設けて、創生審議会委員から選出された委員長、副委員長を中心に議論し、検討を進めていただき、まとめられた案が、今、お手元に配布されている。

この答申案の内容について、はじめに委員長、副委員長から検討内容についてコメントをいただき、詳細については事務局から説明をお願いしたい。

<委員長>

7名の委員で昨年 4 月から 10 月にかけて計 4 回の審議を行った。筋書き通りの会議ではなく激論を戦わせたが、バランスのいい案にうまく着地した。

主な意見としては、京都らしさを前面に出すこと、伝統芸能については演じ手だけでなく、観客や製作者の育成も必要であること、伝統芸能、伝統文化以外の分野（現代芸術、食など）も重要である、などであった。

プログラムは、3つの基本方針に基づいた 7つの視点、11の重要事業で構成されている。11の重要授業の中には、子どもたちを対象にした伝統文化に触れる機会の創出や、ロームシアター京都や京都市美術館の再整備、京都市立芸術大学の移転整備、京都市指定・登録文化財の公開に向けた大規模改修の推進、東京オリンピック・パラリンピック等を契機とした国際的な祭典の開催、等が盛り込まれている。

総花的ではあるが、色々な可能性を含めた案である。

<副委員長>

内容については委員長の説明した内容で相違ない。策定会議はまったく形式的なものではなく、毎回活発な意見が出る会議であった。その結果の表れがこのプログラム案だが、事業内容が非常に多いものとなっている。5年間の間で、これだけ多くの事業を実践できるのかという感もあるが、大きな夢として、一つずつ反映、実践できればと思う。

<会長>

ありがとうございました。次に、事務局から詳細について御説明願いたい。

(事務局より説明)

<会長>

ありがとうございました。それでは、皆様から御質問、御意見をいただきたい。

<委員>

資料の4ページ「プログラムの構成」について意見を申し上げたい。4ページに掲げるプログラムの全体像は、3つの方針、7つの視点、11の重要事業という構成になっているが、冊子の記述順序は、この全体像と異なる構成になっている。具体的には、5ページで3つの方針について記述したあと、6～10ページで11の重要事業を掲げ、11ページ以降に7つの視点に関する記述がなされている。

また、11の重要事業は、「事業内容」と「主な取組」の二段構成で記述されているが、7つの視点のページでは、この「主な取組」項目が、11の事業と並列に「事業例」として位置付けられている。

パブリックコメントでの市民意見にも「様々なことが盛りだくさんになっていて分かりにくい」という意見が見られる。プログラム案の構成上の乱れについては留意すべきことではないか。私は、分かりやすいプログラムとするために、プログラム案の11ページ以降を割愛すべきだと考える。

<委員>

私も同様の感想を抱いた。プログラム案は「誰が、何を、いつまでに」責任を持って事業をするのが不明確な、総花的な内容になっている。スケジュールを立て、必ず責任をもって実現することが、行政や委員会の責任である。プログラムを書いてそのままにするのではなく、毎年必ず、事業を達成しなければならない。行政側はこのプログラムに記載されている内容を本当に実現できているのか。委員の御意見にあったように、責任を持って、できる範囲で英知を結集することが大切なのではないか。

<委員>

私もお二人と同じ考えだが、プログラム案に記載された項目のすべてを行政が行うわけではないし、行政がまず政策の方向を示すことも、計画の役割として大切だと考える。

現在、京都文化祭典の連絡協議会の座長を務めているのだが、民間、一般、NPO等の方がやっている文化イベントだけでも約170存在し、それぞれが情報発信に苦勞している。9ページ「重要事業⑧文化・観光に関する情報の一元的把握及び入場券等を販売するWEBシステムの構築」において情報発信について触れているが、イベントには、観光客をターゲットにしたものや市民をターゲットにしたものが混在している。ターゲットの混在した情報を、情報を集約、提供する側で分類することは困難である。この点については、情報収集したい側が情報を主体的に選択できるように、主な取組として掲げられている「文化芸術情報サイトと観光情報サイトとの強力な連携」を、一元化まで踏み込むことはできないか。

「Kyoto Art Box」のような情報発信手段を拡張して、市民、観光客のどちらも情報が得られる窓口を作成することを提案したい。

また、プログラム案には、食文化に関する言及が乏しい。教育委員会の取組として給食で和食が導入されることになったが、日々の暮らしの中で文化に触れる機会として、食は重視されるべきではないか。京都を訪れる外国人の方々にも、食を通じた文化発信は受け入れやすい内容であると考えます。

そして、プログラム案に記載されている事業の推進については、様々な団体、個人も含めて連携し、オール京都で取り組んでいくことが大事である。

また、京都市役所内でも事業を所管する部局も多岐にわたると思われる。現状では、部局によって文化芸術政策に対する取組姿勢に温度差が感じられるので、庁内でも統一した認識で外部へ協力要請をしていくことが大切である。

#### <委員>

私も皆様と同様に、プログラム案の分量の多さを感じた。

また、6ページ「重要事業①学校教育をはじめ、あらゆる機会を通じた伝統的な文化芸術に触れる取組」に関連した話をひとつさせていただきたい。京都市内のある公立小学校での出来事だが、小学校6年生の音楽授業の一環としてお琴、尺八奏者の先生が来校し、日本古来の尺八や笛の話や演奏、実際に体験する機会があった。そこで校長先生は「一生のうち今日しか「ほんもの」の尺八、お琴に触れることがないかもしれない」と児童に話しかけていた。京都には世界に通用する文化芸術があるのだから、プログラムにあるように、「ほんもの」に触れる機会をたくさん子どもに与えてほしい。そのことが、次の世代を担う子どもたちの育成に繋がると私は考える。そのための予算措置も京都市には講じていただきたい。

和食に関する意見は、私も同様である。子どもたちには米飯給食に人気があると感じている。食の伝統を継承していない家庭もあるので、学校給食で補完することも大事だと考える。

#### <会長>

ありがとうございます。委員からPDCAサイクルの話が出たが、補足説明を事務局からお願ひしたい。

#### <事務局>

プログラム案の26ページ「推進方法」にあるように、事業の評価・点検については随時実施していきたい。

また、プログラム案の記載内容の多さについて御意見を頂戴したが、記載している事業の中には既に着手しているものもあり、すべてが新規に取り組むものではないことを御理

解いただきたい。そして、プログラム案に掲載できる内容を文化だけではなく、関連する関係部局に照会した結果、盛りだくさんとなった経緯がある。内容が多いため、分かりにくくなってしまっているかと思うが、できるだけ分かりやすくするため、7つの各視点において「取組イメージ」という図を掲載し、事業例についても絞り込んだものを11の「重要事業」としている。

#### <委員>

6月の審議会から数えて、今日はまだ2回目の審議会である。これだけの盛りだくさんの事業を提示するのであれば、3回から4回は審議会を開催して審議を行い、修正しながら進めていくべきであった。もし事務局が、審議会が承認をもらう場だと考えているならば、その態度からは、本プログラム案に取り組む姿勢にも疑念を抱かざるを得ない。審議会に全員が出席できなかったとしても、できる範囲で審議会の回数を重ね、しっかりとしたものを作り上げて進めていくべきではないのか。

#### <事務局>

6月の審議会でご承認いただいたように、審議会の委員の皆様は御多忙ということで策定会議を設置し、4回の議論を行ったという経緯がある。御理解いただきたい。

#### <委員>

7ページ「重要事業③国立京都伝統芸能文化センター（仮称）の創設とそれに向けた先駆的取組の実施」について、なぜ施設名称に「京都」と冠するのかお伺いしたい。国立の施設ならば、「京都」は不要であり、この内容では、京都の伝統芸能文化の話しかセンターでは取り扱わないように見えてしまう。

例えば、全国高校生伝統文化フェスティバルのように、日本各地の伝統文化を広く受け止めるイベントが京都で開催されている一方で、この書きぶりでは視野が狭い印象を与える。7ページの重要事業③で掲げる主な取組として、全国高校生伝統文化フェスティバルと連携した取組も書き込むべきであると考えます。

一つでも視野の狭さを感じさせる事業があると、他の事業も視野が狭いのではと心配してしまう。もっと大きな視野で考えてほしい。

#### <委員>

委員が指摘をした構成上の混乱については、11～24ページの内容を5ページと6ページの間に持ってくれば概ね対応できると考える。

一方で、11の重要事業について新規性が感じられない所が気になる。どの点に新規性を込めたのか、事務局は説明してほしい。

また、こうした行政計画においては、冒頭で掲げる意義や精神の部分が重要だと私は考

えている。その点について十分な内容になっているだろうか。2 ページ「プログラム策定に当たって」や 5 ページ「プログラムの方針」に、京都文化への思いが込められるかが重要だろう。

加えて、近年は文化をめぐる社会情勢が変わっているが、その点についてはどの程度キャッチアップできているだろうか。異文化、多文化を感受する姿勢が必要だという話が出てきている中で、ただ京都の文化を守り、支え、育てることを掲げるだけの内容にせず、異文化や多文化に対する姿勢についても、方針や視点に加えていただければと思う。

#### <委員>

プログラム案の中には、来訪者に対する文化の見せ方と、市民に対する豊かな文化の供給と、二つの視点が混在している。どちらに重きを置くのか分かりにくいという点が、各委員から指摘されているプログラム案の分かりにくさの根本にあると私は考える。2020 年のオリンピックとの連携を前文で謳うのであれば、本プログラムの軸足は対外的な側面になるだろう。両者が補完関係にあるのはいうまでもないが、どちらに軸足を置くかについて、意識した構成にするべきである。

また、プログラム案で列举されている各種施設の整備について、各施設を整備後どのように位置付け、他施設との差別化を図るのか、不明確であると感じる。たとえばウイーン劇場だと、保守的な演目を受け持つ劇場、庶民的な演目に強い劇場、といった機能分担がなされている。ロームシアターにしても、オペラホールとして大成功している琵琶湖ホールとどう差異づけるのかについて検討するべきだろう。

差別化を図るという点では、伝統文化だけでなく、西洋文化についての処遇も、メリハリをつけて記述すべきである。京都にある以上、伝統文化に軸足が置かれるのは当然だが、例えば、京都市交響楽団は世界に誇れる楽団である。西欧的なものと伝統文化的なものとをうまく配分すべきだと考える。

#### <委員>

各委員が指摘するように、プログラム案が総花的という点については同感である。そして、委員が提案されたように、11 ページ以降記載内容の削除についても、個人的には賛成である。一方、行政文書なので総花的になることは仕方がないとも感じている。

内容的に絞り込みが難しいのならば、成果の見える形にしていくことが必須だろう。本プログラムは創生計画を背景とした時限的な補強措置との位置付けだが、後世の人々に印象が残るような事業を本プログラムの期間中に実施していただきたい。

また、委員からの御意見にもあったように、「WEB サイトに掲載したから市民に周知した」と済ませるのではなく、あらゆる手段を利用して、行政が何に力を入れているかということ伝えていく必要がある。市民の文化芸術活動の支援についても、既存制度を市民に対して分かりやすい情報発信を行い、制度を活用するモチベーションを市民が抱きやすい仕

組みを目指してほしい。

そしてPDCAサイクルについて、26ページに掲げられた評価・点検方法では抽象的である。より具体的な仕組みを示すことが必要だ。

最後に、プログラム案ではハード整備が前面に出ているが、ソフト事業の中にこそ大切なことがたくさんあると私は考える。例えば市民からいただいた意見の中で「C（プログラム運用時に参考とするもの）」に位置付けられたものこそ、大切にしていきたい。

#### <委員>

先ほどから食文化に関する御指摘があったが、食文化には、命をいただくという側面と、味覚、感性を磨くという側面がある。ここに立ち返ることが求められていると感じた。

プログラム案を拝見して、非常に精力的に構想されたとの印象を抱く一方で、総花的に見えてしまうのは、文化芸術とは何かという統一したメッセージが打ち出せていないことに起因するのではないか。衣・食・住のそれぞれの美と、生きていることの美、生き方の美しさ、人間の生き方の問題をどう考えるか等、再定義していくことが文化芸術を再検討することにつながるのではないかと考える。

また、文化関係者は、自分関わっている領域に文化なるものを仮託してしまいがちだが、その固定観念を覆せるようなものを探っていけばよいのではないか。2ページ「プログラムの策定に当たって」ではかなり大きな理想が謳われている。実現のためには、一般的に文化芸術といわれているものを再定義し、文化芸術の幅広い分野で京都が中心となるためのキーワードを抽出し、キーワードを軸に事業を行うといった、体系化が必要だと考える。それぞれの立場で語られる文化芸術をプログラム案として寄せ集めるのではなく、新しいものを探って、掲げる必要があると私は考える。

#### <委員>

委員の御指摘はもっともだと考える。象徴的なのは、プログラム案に記載されている事業の多くで、事業主体を「京都市民」や「京都市」ではなく「京都」とぼかしていることである。この点を26ページ「推進方法」で明確にすれば、記載内容は立派なので、私はこれでいいと考える。具体的には、行政は媒体として市民団体やNPO等をバックアップする役割として位置付けるのがよいと考える。

#### <副会長>

委員がなされた整理はまさにそのとおりである。一方、市民向けに打ち出すことを考えると、対内的な側面を外すことはできないだろう。

本プログラムの各記載項目については、それぞれ相当な具体化が求められる。今後の絞り込みは必要だろうが、大きな方針としては、正しい方向に向かっていると考える。

一つ意見を述べさせていただくと、本プログラムでも言及されている次世代の育成につ

いては、教育プログラムという根本部分に起因しているとは考えている。例えば、京都に立地する芸術系大学で実施されている教育を子どもたちに展開することなども、今後は必要だろう。一回限りの感動的な体験では、創造者の育成にはつながらないと考える。スポット的な「ほんもの」との接触ではなく、継続性の担保を考えるべきだ。

また、9 ページ「東京オリンピック・パラリンピック」等を契機とした国際的な祭典の開催」に掲げられている主な取組として、キュレーターの会議という項目が追加されている。これに関しては、本年開催される PARASOPHIA の充実、継続がまずは社会的に重要である中で、キュレーターの会議などは内向きの話であり、取組項目として掲げられることに違和感を覚える。こうした話は、教育や発信システムが順回転した結果としてついてくるものである。

人材を育てることは京都にとって重要なことだと考える。人材育成は行政の枠ですることも大事だが、大学での人材育成に向けた情報提供や依頼も大事である。例えば、委員長は京都市立芸術大学の学長として、日本伝統音楽研究センターに大学院を作り、人材育成の機能を持たせた。こういった地道な話から人材育成という話が出てくるのであり、人材の育成をそれぞれの大学に呼びかけ、大学のプログラムに専門家が協力するシステムを構築した方がよいと考える。

全体としては、京都を意識してよく練られた内容だと思う。同時に、全体像の方向性はよいが、2020 年に向けて、事業の中身の絞り込みが不可欠になるだろう。

#### <委員>

プログラム案の根幹にあるのは、京都は東京のミニ版ではないし、だからこそ京都だという思想である。まちなみ一つ取り上げても、京都では高さ規制や屋外広告物の規制といった形で、経済活動を抑制してでもまちなみを守ろうという姿勢を示している。厳しいチャレンジを敢えて進めるのが京都のまちだと私は考える。

京都のまちのアイデンティティは、単なる経済的な価値だけではなく、文化的な価値や誇りを大事にする世界的にも稀有なまちだということである。だからこそ、市民、企業と文化的な価値を共有して、日々のライフスタイルの中で一致できるようなまちづくりを実践してもらうことが不可欠である。そして、次世代をどのように育てていくのか、京都が持つ文化に対して誇りや意志、価値観、意識を持った子どもが育つ環境をどう整えるかについてプログラムに書き込むことが重要になる。

文化とは何かという御指摘や、多文化、異文化の尊重というお話があったが、例えば、伝統文化から見れば現代芸術は異文化であり、多文化である。しかし、それを文化芸術という観点で尊重し、自ら理解し、あるいは挑戦してみようと思いつ市民を育てる土壌をこの京都のまちに築くことが、本プログラムの根幹にあると感じている

この計画が実践される中で、市民の皆様や多くの団体の皆様がこの計画に基づいてまちをつくり、さらに京都のまちに磨きがかかり、違うように見えてくる。それが結果として



観光にもつながるし、魅力の発信にもつながると私は考えている。

一方で、計画としては、行政がつくる計画なので、整合性や分かりやすさ等が大切になるだろう。プログラムの構成についても、重要事業を強調する構成にしてもよいと考える。

#### <事務局>

委員の皆様におかれましては、構成から各項目に至るまで、様々な御意見をいただきありがとうございます。構成につきましては、先ほどご説明しましたように、3つの方針、7つの視点から様々な事業がある中で、特に重要な11事業を6ページから掲げさせていただいたという経緯がある。この部分の構成については、事務局も悩みぬいてこの形になったのが実情である。また、11ページ以降に記載されている内容の割愛については、京都市役所の各部局から集約したものとして、本プログラム中に残したいと考えている。

今後の市民向けに情報発信を行う際には、誤解のないように、プログラム構成に説明書きを加えたり、視覚的な手段の活用など、発信ツールの工夫を検討したい。本編をまとめる前に、改めて委員意見を反映して整理したいと考えている。

#### <会長>

総花的だという意見が結果として浮き彫りにしたことは、京都という都市の歴史と性格に由来する文化的な贅沢さ、豊かさではないかと感じた。しかしながら、それゆえに分かりにくさにつながってしまったということだと思う。

策定委員の方々も、非常にお忙しい中で一生懸命やってくくださったことと思いますし、審議会も数少ない回数ではありますが、プログラム案に対して忌憚のない率直な御意見をいただいたということは、非常に意味のあることだと思う。

皆様方の本日の御意見を振り返りますと、内容そのものの良し悪しではなく、案としては非常によくまとめられているが、整理の仕方や、細かい部分の整合性に関しては修正の余地があるという御意見が多かったように思う。

皆様からは課題点の解決法やヒントも頂戴したので、このプログラム案に関しては、会長、副会長、事務局で預かり、修正をさせていただきたいが、それでよいか。

(特に意見なし)

#### <会長>

特に御意見等ないので、本日の議事はこれで終了する。ありがとうございました。

(意見交換終了)